農業後継者育成基金事業

平成３０年度農業後継者特別支援事業

事業主体名　鹿児島県立農業大学校農学部野菜科

１　目的

近年民間種苗会社からも単為結果性品種「ＰＣ筑陽」が育成販売されてきている。

単為結果性品種は，ホルモン処理の労力軽減やマルハナバチの導入費用軽減，農薬使用の制限回避等メリットが多いことから，交配を必要とする慣行品種「筑陽」と比較し栽培の可能性を実証する。

ナスの栽培状況

２　実施状況

（１）比較栽培の実施

８／１にＰＣ筑陽及び筑陽をは種し，９／５に定植した。

２品種とも初期にダニ等の害虫が発生したが，薬剤や天敵による防除ができたため生育は順調で大きな生育差も見られなかった。

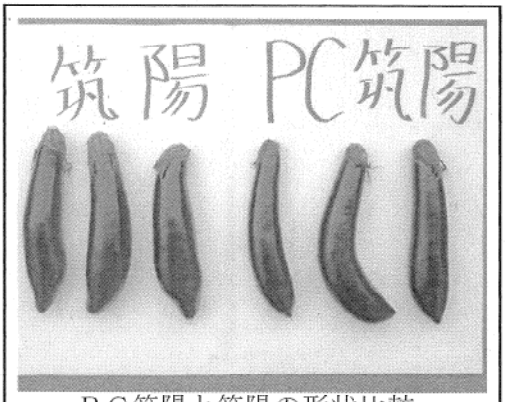
ＰＣ筑陽については初期生育を旺盛にするため第１段，２段花は切除した。

このため収穫は筑陽が１０／５に始まり，ＰＣ筑陽より１０日早かった。

筑陽の交配はホルモン処理で着果を促したが，ＰＣ筑陽はそれを必要とせず，確実に着果した。

２品種の果実の形状に大きな差はなく，別々に販売して消費者の意見を聞いたが，大きな反応はなかった。

筑陽にはがくに小さな棘があったがＰＣ筑陽にはなく，収穫がしやすかった。



ＰＣ筑陽と筑陽の形状比較

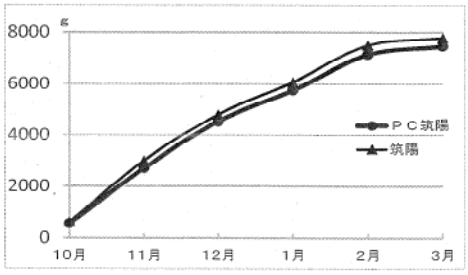
（２）収量比較の実施

２品種の収穫量調査を１０月から実施した。

期間を通じ２品種とも同じようは収量を示し，３月８日時点での１株当たり収量はＰＣ筑陽が７,４５２ｇ，筑陽が７,７８２ｇで品種の収量差は約４％に止まった。

（３）総合考察の実施

ＰＣ筑陽と筑陽の品種比較を実施した結果，３月の時点で収量や品質は同程度であるが，ＰＣ筑陽の方が交配作業時間やマルハナバチの導入費用が必要でないことから，ＰＣ筑陽は有望な品種であると判断した。



１株当たり収穫量の累計

３　今後の課題，取り組み

（１）ＰＣ筑陽の栽培技術向上